

さようなら、母校。

3月31日、市内の二つの中学校が、その長い歴史に幕を下ろした。平成20年3月に閉校した荒尾第五中学校に続く、二つの中学校の閉校。そしてこの春2二校は統合し、「荒尾海陽中学校」として生まれ変わる。

閉校と統合は、本市の学校規模適正化の施策によるものだ。本市の少子化の現状と人口の動態・地域的比重などさまざまな状況を考えると、避けて通れ

ない大きな課題だった。子どもたちにとっては、豊かな人間関係の形成や社会性の育成などを含む教育環境の整備は必須。学校がなくなる地域には、コミュニティの衰退など解決すべき課題が生まれる。しかし、将来の荒尾を担う子どもたちとその未来を「宝」と思うからこそ、地域社会の人々の深い理解と協力のもと、二つの学校と地域は、新たな未来を見据えて歩み出す決意をした。



▲ 返納された二中学校旗



▲ 返納された一中学校旗

時を経て色あせた校旗が、畳まれていく。重厚な金系の刺繍の旗には、歴史と時間が降り積もり、この瞬間、最も重さを増した。

荒尾第一中学校と荒尾第二中学校の両校は共に、昭和22年4月に閉校した。63年という月日の間、輩出した卒業生は一中で約1万9千500人、二中で約1万2千人にのぼる。年度末の閉校に先駆け、2月27日（土）に一中、翌28日（日）に二中でそれぞれ、閉校式が行われた。全校生徒数637人の一中は、在校生を代表して三年生199人が出席

し、二中からは在校生全員180人が参加した。両校とも、在校生だけでなく、卒業生や地域住民、かつての教員などが多数出席し、閉校という節目と、その記念となるひとときを共有した。一中では、閉校式の後、吹奏楽部の演奏が行われた。新たな門出をイメージさせる力強い曲が3曲演奏され、未来への希望と決意を



末廣夏美 一中生徒会長「一中、最高」最後に添えられた言葉に思いがこもる

県下でも優秀な成績を収めていた一中吹奏楽部の演奏は圧巻



一中の思い出として語られる最も大きな事件が、昭和56年に起きた火災だが、この火災は閉校に際しても思わぬ影響を与えた。学校に保管されていた卒業アルバムが焼失したため、閉校記念誌に掲載する資料集めに思わぬ労力が必要となったのである。しかし実行委員会のご苦勞の甲斐あって、記念誌には、昭和30年から昨年度までの

一中の思い出として語られる最も大きな事件が、昭和56年に起きた火災だが、この火災は閉校に際しても思わぬ影響を与えた。学校に保管されていた卒業アルバムが焼失したため、閉校記念誌に掲載する資料集めに思わぬ労力が必要となったのである。しかし実行委員会のご苦勞の甲斐あって、記念誌には、昭和30年から昨年度までの



▲ 一中閉校記念誌「軌跡」。学校に関わった人々からのメッセージと、懐かしい卒業生の写真が満載

全アルバムから採られた写真が、在校生の集合写真とともに掲載されている。一中での閉校式の後に、一中は、全校生徒による構成詩が発表された。在校生が一人一人、二中で学んだことや思い出、学校生活で得た夢について大きな声で言葉にしていった。自らの胸に思い出を焼き付けるように、そして卒業生の胸に去来する母校の名が消えても、よき伝統は途切れない。新しい学び舎で新しい生徒たちに、確かに手渡される。新たな一歩が今、踏み出される。



▲ 右田和也 二中学生徒会長は、一言一言、思い出をかみ締めるように言葉を紡いだ

第二中学校校舎。今後は二小と三小の統合小学校の校舎として生まれ変わる



／さようなら／誇りを胸に／いつまでも忘れず／響き合う心／たいせつに／この歌詞とメロディに込められた学校への思いと二中学生の結束の強さ、そして歌い上げる彼らの表情は、寂しさの先にある希望をしっかりと見据えていた。

4月8日（木）、市内の小・中学校で入学式が行われる。その中に、これまでの一中生と二中生が集う統合中学校「荒尾海陽中学校」も含まれる。二つの学校の歴史を背負い、伝統を受け継ぎ、新たな歴史と伝統をつむぎ始める。二つの中学校の卒業生の強い思いと地域社会の深い愛情を受けて。



▲ 一中記念式典出席者全員による校歌斉唱



▲ 二中閉校記念誌「二中」。卒業生や在校生のメッセージのほか、学校を育んだ「地域のあしあと」も掲載

▲ 二中記念式典出席者全員による校歌斉唱